様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 5 月 30 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2005 ～ 2008
課題番号：１７５２０４４８
研究課題名（和文）　中世武士団安芸小早川領域における石塔の基礎的研究 ―宝篋印塔・五輪塔を中心に―
研究課題名（英文）　The Basic Research on the Stone Pagodas in the Territory of Kobayakawa Clan (Medieval Warrior Bands) in Aki ― Focusing on the Stone Pagodas, “Gorintou” and “Houkyouintou”―

研究代表者
舘鼻　誠（TATEHANA　MAKOTO）
専修大学・文学部・兼任講師
研究者番号:００３８４６７８

研究成果の概要：
安芸国の中世武士団小早川氏の領域（安芸東南部）には、中世の石塔（宝篋印塔・五輪塔）が無数に残る。本研究はこうした石塔を歴史資料として活用するため、残欠に至るまで一つひとつ調査を行い、所在位置や原位置の確認、個体数の把握、各部寸法や特徴など、今後の研究に必要な基本データを収集したものである。調査地点は 6 市町・279 箇所にわたり、確認した石塔は、宝篋印塔 339 基、五輪塔 1042 基、一石五輪塔 487 基に及ぶ。旧三原市域を除けば、初めて実施された石塔の悉皆調査であり、その意義は極めて大きい。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2005 年度	900,000	0	900,000
2006 年度	700,000	0	700,000
2007 年度	700,000	210,000	910,000
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
総　計	3,500,000	570,000	4,070,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・日本史
キーワード：石塔・宝篋印塔・五輪塔・歴史景観・日本中世史・小早川・武士団・安芸

１．研究開始当初の背景

中世の石塔を代表する宝篋印塔や五輪塔は、そのほとんどが各種石塔の寄せ集めや残欠となるため、これまでは様式的に優れたものを中心に、主に美術史的な観点から研究が進められてきた。しかし近年は歴史資料としての認識が高まり、悉皆調査などで得られたデータをもとに造立主体の特質や石材の流通過程など、石塔を素材にしながら地域の歴史を多角的に読み解く作業が進められている。しかし各地における石塔の実態解明は調査の進捗状況によってかなりの開きがあり、たとえ悉皆調査をしても石塔の種類と個体数の把握にとどまる場合も多い。これは残存する石塔のほとんどが無銘かつ残欠となるため年代を特定しにくいことが背景にあるが、このままでは、いつの時代のものが、どこにどれだけあるのか、そんな基本的な情報すら把握されないまま、貴重な歴史資料が散逸する恐れがある。さらに近年は廃村によって石塔の存在すら忘れ去られる場合も出てきた。それは石塔の研究にとどまらず、地域の歴史を解明する上でも大きな障害となろう。本研究はこうした認識にたって、いまだ手つかず

の状態になっている安芸国の中世武士団小早川氏の旧領域内（安芸東南部）に多数残る宝篋印塔と五輪塔の悉皆調査を行い、個体ごとに計測と撮影を行って石塔の基本データを収集するために計画された。

２．研究の目的

広島県の瀬戸内海沿岸部、とくに尾道周辺から三原・竹原・東広島市にかけては滋賀県や奈良県とならんで石塔（宝篋印塔・五輪塔）が多い土地となる。その背景には良質な花崗岩の産地を控え、鎌倉後期から南北朝期にかけて港町尾道において西大寺流律宗集団による寺院の造営・再建があいつぎ、そのなかで石切技術が鍛えられたこと、そして何より当該地域の領主となった小早川氏がみずからの信仰のよりどころとして数多くの宝篋印塔を造立したことがあげられる。しかしその数の多さ故か、旧三原市（2005 年合併以前の三原市）をのぞけば、これまで一度も石塔調査は行われてこなかった。しかし石塔は貴重な歴史資料であり、それを活用するならば、文字資料が少ない地域にあっても豊かな歴史像を描くことが可能になる。しかもこの地域は 14 世紀から 16 世紀に至るまで小早川氏が一貫して領主を務めたことから、領主の交代にともなう造立の変化などを捨象して石塔の変遷を考察できる数少ない地域となる。こうした視点から、本研究では、小早川氏の旧領域内における宝篋印塔と五輪塔の悉皆調査を実施して、その基本データを収集するとともに、石塔を通して地域の歴史を描くことを目的として開始された。

３．研究の方法

研究にあたっては、宝篋印塔と五輪塔の全容を解明するため、各部をそろえる完全塔はもちろん、寄せ集め塔や残欠に至るまで歴史資料として扱い、その把握に努めた。調査日数は計 47 日間に及び、現地では、所在位置や原位置の確認、個体数の把握、ノギス・曲尺・メジャーなどを使用しての各部計測を行い、形態観察なども行って事前に作成した B4 の調査表に記入した。また個体ごとに各部撮影を実施し、必要に応じてマーコを使用して実測図も作成した。さらに造立地周辺の歴史的な景観を復元するため、現地での聞き取りをはじめ、明治期の地籍図なども使用して情報の収集に努めた。なお比較参考のため広島県世羅郡世羅町・尾道市中心部・福山市・廿日市市などでも石塔の調査・計測を実施した。

４．研究成果

(1)小早川領域における石塔の概要

今回の石塔調査は、中世の小早川領に相当する広島県竹原市、三原市本郷町・大和町・久井町、東広島市安芸津町・河内町、呉市安浦町・音戸町、尾道市瀬戸田町、豊田郡大崎上島町において初めて実施された本格的な悉皆調査であり、調査地点は 279 箇所、確認した個体数は 1868 基（宝篋印塔 339 基、五輪塔 1042 基、一石五輪塔 487 基）に及ぶ。こうした石塔は各地に分散し、また計測に多大な時間を要することから、この調査をもってすべての個数を確認・計測しえたわけではないが、竹原市域は 9 割がた調査を終え、安芸津・安浦・大和・大崎上島町においても主要な石塔はほぼ調査を完了した。当初はこの成果に同じく小早川領となる旧三原市（2005 年合併以前の三原市）が 1975 年から 4 年間かけて実施した詳細な石塔調査の個別データ（宝篋印塔 307 基、五輪塔 1695 基分）をあわせ、小早川領における石塔の全容を解明することを予定したが、その調査データが所在不明のため閲覧できなかった。概要は『三原市史第七巻民俗編』(1979 年）に収録され、一部は『三原市の石造物』（1979 年）にも収録されたが、全体の 2%にも満たず、このため急遽調査範囲を三原市の旧浦郷を中心とする地域にまで広げ、データの収集に努めた。

このように作業はまだ道なかばだが、当該地域における石塔の大半を調査しえた意義は大きく、『三原市史』の成果と今回の成果をあわせれば、安芸東南部における石塔の概要を把握することは十分に可能であろう。

石塔の分布は、竹原小早川氏の拠点であった竹原市新庄・東野・西野町や、内海衆の拠点であった安浦町寺迫など中世武士団の本拠に集中し、とくに宝篋印塔はその傾向が顕著となる。これは宝篋印塔の造立主体が国人クラスの武士団であったことを示唆するが、16 世紀になると五輪塔の分布地域が広がり、家臣団クラスのなかにも石塔を建てる動きが広く浸透してきた様子を読み取れる。

宝篋印塔と五輪塔の比率は、旧三原市の調査成果を含めると宝篋印塔 586 基、五輪塔 2560 基に及び（重複分は除く）、その割合はおよそ 1 対 4.4 となる。五輪塔が多くを占めることは他地域とかわらないが、当該地域では宝篋印塔の占める割合が極めて高い。このため多数の五輪塔に囲まれて宝篋印塔が 1～2 基建つといった一般的な光景とは異なり、多数の宝篋印塔が建ち並ぶ光景も存在した。たとえば小早川氏の氏寺となる三原市の米山寺には、後世の整備とはいえ今も 20 基の宝篋印塔が建ち並び、残欠を含めると少なくとも 35 基の宝篋印塔があったが、五輪塔は 14 基しかない。また小早川茂平の創建と伝え、一族の琴江令薫も住持を務めた本郷町の永福寺も、五輪塔の 8 基に対し、宝篋印塔は 6 基あり、その比率は高い。また小早川一族としての生口島に拠った生口氏の氏寺と推察される光明寺においても、宝篋印塔 20 基に対して五輪塔は 7 基しかなく、その差は 3 倍

となる。このように小早川家ゆかりの寺院では宝篋印塔の比率が高い傾向が見られ、小早川氏が信仰のよりどころとして宝篋印塔を順次造立していった様子がうかがえる。これに対し小早川家の家臣であった磯兼氏の本拠（竹原市東野町）では 10 基の五輪塔を確認できるが、宝篋印塔は残欠すら存在しない。同じく三原市本郷町の船木では周辺から集めたという五輪塔が 32 基あるが、宝篋印塔の残欠はひとつもない。なかには五輪塔にまじって宝篋印塔が 1～2 基建つ土地もあるが、多くの場合 16 世紀末頃の造立となるから、この場合も戦国期までは五輪塔しかなかった土地になる。

このように小早川領内では宝篋印塔が建つ空間と五輪塔が建つ空間がある程度峻別されていたようで、宝篋印塔は小早川家やその一族であることを表すシンボル的な塔として祀られたらしい。このことは逆に宝篋印塔の比率が高い土地や寺は小早川氏と縁が深いと見ることも可能であろう。これに対し 16 世紀末頃から登場する小型の粗雑な宝篋印塔は、これまで五輪塔しか建てられなかったものたちが模倣して造立したものと推察され、造塔主体の階層の下降を読み取れる。

小早川領内の宝篋印塔の初見は、小早川氏の氏寺となる三原市米山寺にある元応元年（1319）の銘をもつ塔となる。以後、小早川領内では基礎の上部を反花とするもの 75%、二段に造るもの 21%、反花の略式系となる繰形とするもの 4%の 3 形式が造立される。その割合が示すように、主流は反花式となり、中央に複弁一葉、その左右に間弁を配し、隅にも複弁を造る。また二段式は南北朝期のものに多く見られ、小早川氏が当初は二段式を選択し、室町期以降、反花式を広く造立していた様子がうかがえる。なお二段式の基礎であっても基壇は反花座とするものが一般的となる。

基礎の側面は輪郭をまいて格狭間を入れるが、四面すべてに輪郭をまく事例は 10%と少なく、多くは三面 67%となる。また 16 世紀末以降になると一面や素面の基礎も登場する。これは塔を小型化（基礎幅 30 ㎝以下）する動きと対応するもので、造立主体の下降と連動している。なお当該領域では格狭間のなかに紋様を刻む近江式は存在しないが、笠の隅飾のなかに蓮華座月輪を薄肉彫りするものや、塔身に仏座像を彫るものが数例確認される。また基礎と塔身の間に中台を設けるものがあり（越智式）、伊与との共通性が見られる。こうした共通性は各部比率や格狭間の形などにも見られ、当該地域の宝篋印塔を芸予タイプとして整理できる。

宝篋印塔の笠に関しては、段形を定式通り上 6 段下 2 段に造るものが 48%を占めるが、上 5 段下 2 段とするものも 34%あり、16 世紀末期以降になると上 4 段下 2 段、上 4 段下 1 段、上 3 段下 1 段といった略式形の小型塔も登場する。これは基礎の輪郭面を 1 面あるいは素面にする動きと対応する。

つぎに五輪塔は、三原市須波西町や尾道市瀬戸田町に鎌倉中期頃の凝灰岩製の五輪塔が各 1 基残るが、花崗岩製では尾道市瀬戸田町の光明坊にある鎌倉末期の五輪塔 2 基が初見となる。ついで南北朝期から 1400 年前後にかけて、忠海・安浦・大和・安芸津・大崎上島町に比較的大きな五輪塔（火輪の軒幅各 45.7・45.0・41.1・36.5・34.3 ㎝）が造立されたが、小早川氏が宝篋印塔を選択したこともあって五輪塔は比較的小型のものが多く、室町期以降になると 30 ㎝以下のものが多数を占める。なお当該地域では、近世になると五輪塔と並行して一石五輪塔が多数造立されていくが、竹原市に限るとその数は極めて少なく、基本的に石塔を造立しなくなる。これは旧三原市とは対称的な動きだが、近世において城下町として発展した三原と、真宗が浸透し、農村に帰した竹原小早川家の本拠との違いによるものだろう。また瀬戸田町も一石五輪塔が多い土地だが、これは瀬戸田商人たちによって造立されたものと推察され、彼らの豊かな経済力を物語る。

石塔に使われている石材は、そのほとんどが花崗岩になる。とくに南北朝期の石塔には良質の花崗岩が使用されており、それ以降のものとはあきらかに質が異なる。当該地域の周辺には花崗岩の産地が多く、石材の調達は容易だったと思われるが、産地は特定できていない。ただ錆の出方などから岡山県の北木石に類似するものが散見する（写真左）。ま

たピンクサーモン系の長石を含む石材もあり、岡山県の万成石に類似する（写真右）。芸備地方では 16 世紀になると尾道の石工の活躍が確認できるが、おそらく南北朝期の頃から西大寺流の技術を受け継いだ石工集団が尾道周辺の花崗岩を使用して石塔を造立していったのではないだろうか。

なお 16 世紀末期以降に造立された粗雑な宝篋印塔や五輪塔の一部に角礫凝灰岩を使用したものが散見する。五輪塔の空風輪を別個体として造るものも数例存在し、西讃岐の天霧系石塔が搬入された可能性がある。

(2)編年の作成

無銘の石塔の年代を絞り込むため小早川領内における宝篋印塔と五輪塔の編年を作成した。作業にあたっては、紀年銘を持つ石塔を基準塔に設定し、型式把握と各部の計測を行って比率を割り出し、参考値とした。ただし小早川領内の紀年銘のある石塔は、宝篋印塔 8 基（14 世紀基 6 基・16 世紀 2 基)、五輪塔は 0 基であるため、周辺地域における芸予タイプの宝篋印塔 5 基、五輪塔 2 基についても計測を行い基準塔とした。

南北朝期の宝篋印塔の基礎は、全高/幅の比率は 0.72 以下、側面高/幅の比率は 0.53 以下、側面高/全高の比率は 0.69 以上となり、鎌倉末期と比較すると基礎上部の高さがわずかに増すものの、全体的にはなお低さを維持する。また輪郭の上下幅の比率も 1.2 以下でほぼ同幅となるが、輪郭の上幅/横幅の比率は 1.5 前後となって鎌倉期よりわずかに横幅が広がるが、さほど目立たない。また二段式の基礎は、1 段目の段形側面を横の輪郭の内側の線上に一致させる（写真左)。反花式の場合は、反花座の先端を側面より内側に入り込ませ、蓮弁の厚みは薄いが、傾斜は増す。また格狭間の花頭形は、上の輪郭線に沿って水平に左右に開くA型か、ゆるやかな斜線で左右に開くB型を基本とし、1360 年代までは格狭間の中心から左端までの長さと中心から左内側の茨までの長さの比率が 0.5 以上あり、茨の位置を中心より端寄りに造るが、1370 年代になると中間か、わずかに中心よりに造るものが登場する。また格狭間の脚間は、鎌倉末は輪郭下端線の 1/5、南北朝期にはいると 1/3 の幅をもつタイプが一般化するが、その中間タイプも登場する。ただしいずれも脚は茨の内側に切る。なお二段式のなかに南北朝期の比率を有しながらも、上部段形の側線を横の輪郭内側線と一致させず、わずかに外側に出すものがある（写真右)。初見時期は明確にしがたいが、14 世紀末頃から登場するタイプと推察される。

上部段形と輪郭内側線の位置

14 世紀末から 16 世紀前半までは紀年銘をもつ基準塔が存在せず（銘は墨書したのだろう)、年代特定が難しい時代となる。ただし時代が下るにつれ、基礎の全高とくに反花の高さが増し、先端は側面にせり出して 1547 年には側面と一致させる。側面の輪郭も下や横の幅が広がるが、さほど広がらないタイプ

A 型(1348 年)

B 型（1319 年）

A 型(1578 年)

E 型（1598 年）

格狭間の類型

もあるので、この点は判断が難しい。それでも花頭形の茨の位置が中心に寄り、1547 年には脚と茨の位置を一致させるなど、16 世紀中頃にかけて少しずつ古式を崩していく。したがって南北朝期の基礎を上限に、16 世紀中頃や後半の基礎を下限に設定すれば、ある程度の時代は予測できよう。

1570 年代にはいると、基礎の高さ/幅の比率は 0.79、側面高/全高の比率も 0.67 となってさらに高さが増し、輪郭幅の比率も上/下が 1.6、上/横が 2.5 となって下と横の輪郭が拡幅する。反花の先端は厚みを増して側面と一致させ、格狭間の比率は 0.34 となって左右の茨はさらに中心による。これが 1598 年頃になると、基礎の比率は 0.84 まで上昇し、輪郭幅の比率も上/下は 1.6、上/横は 2.6 となって、花頭形の中心を三角形に造るD形や半円形に造るE型が登場するが、1620 年頃になるとふたたび古式に戻す動きが出てくる。ただし反花の先端は厚みがあり、側面と一致させる点は 16 世紀後半とかわらない。

つぎに笠は、基準塔が少なく判断が難しいが、南北朝期の笠は、全高/軒幅の比率が 0.8 前後で上部段形を垂直に造り、軒幅/左右隅飾の間隔の比率が 0.4 前後のものとなる。なお時代が下るにつれ隅飾が傾斜すると指摘されるが、1364 年の笠でも 98 度外傾するから、傾きを判定基準にするのは慎重を要しよう。むしろ下の円弧の造り(丸み)に時代差が

1357 年

1578 年

現れる。また 15 世紀にはいると 14 世紀の特徴を持ちながらも 1 段目の段形と軒幅との間を狭くする傾向が見られ、これは時代が下る中で顕著となる。また段形の高さも不均衡になり、初見時は特定しがたいが、戦国期には 1～2 段目の蹴込み部分を内側にくいこませる動きも登場する。1570 年代にはいると、笠の高さ/軒幅の比率が 0.88 となって高さを増し、隅飾の間隔の比率も 0.30 となって間が狭まる。また隅飾の下の円弧が小さくなって丸みをなくし、16 世紀末には直角に近くなる。このほか小早川領では隅飾の輪郭を下端に向かうほど幅広にするものがある。この傾向は南北朝期の笠に登場し、時代を通して見られる。なお 16 世紀末になると、小型の宝篋印塔が各地で建てられるようになるが、米山寺の墓所にみられるように、同時期においても南北朝の塔と遜色のない規模(基礎幅 40.7 ㎝)の塔も製作されているから、当主クラスの塔の規模は、それほど変化はなかったとみてよいだろう。また基礎の大きさの分布から見て、基礎幅 40 ㎝前後の塔は小早川家の当主クラス、37 ㎝前後の塔は一族クラスを造立主体に想定できる。なお五輪塔の編年に関しては紙幅の関係で省略する。

(3)個別事例研究

本研究では宝篋印塔や五輪塔を個体ごとに調査し基本データを収集した。そのデータは調査地点ごとに整理し、『中世武士団安芸小早川領域における石塔の基礎研究―宝篋印塔・五輪塔を中心に』と題する報告書にまとめ、協力者や関係機関等に配布した。その内容の一部を、竹原市新庄町の葛子神社にある宝篋印塔の調査データを事例に以下掲示する。なお紙幅の関係で写真等は一部略した。

葛子神社（権現神社）の境内南側に 1 基の宝篋印塔が建つ。宝篋印塔は、相輪の一部が欠けるものの各部を完備し、反花式の基壇も備える。基壇は上部に複弁三葉、その隅に複弁の反花を刻出し、全体の高さ 19.6 ㎝、側面の高さ 9.1 ㎝、下端幅 77.7 ㎝、上端幅 71.5 ㎝となる。隅の反花座は前面左端が 5.7 ㎝、右端は 5.5 ㎝入り込んで刻出する。

基礎は、全体の高さ 30.6 ㎝、側面の高さ 23.0 ㎝、幅 44.2 ㎝となり、上部は二段式となる。1 段目は、高さ 3.8 ㎝、側面幅 35.1 ㎝、2 段目は高さ 3.9 ㎝、側面幅は 26.1 ㎝となり、いずれの段形も直角に造る。三面に輪郭をまいて格狭間をいれ、上部段形の側面は輪郭の内側線と一致する。輪郭の幅は上 3.4 ㎝、下 3.4 ㎝、左 4.6 ㎝となり、縁厚は 0.8 ㎝となる。格狭間の花頭形は、上の輪郭に沿って水平に左右に開くＡ型で、中心から左端まで 14.5 ㎝、内側の茨まで 7.2 ㎝となり、外側の円弧幅は 4.0 ㎝あって内側の円弧幅 3.2 ㎝より大きい。脚幅は 8.6 ㎝、脚高は 1.9 ㎝で、脚は内側の茨よりも中心よりで切る。格狭間の縁厚は 0.8 ㎝、面のふくらみは輪郭面とほぼ同じになる。

塔身は、高さ 22.0 ㎝、幅は上下端ともに 22.7 ㎝となり、四面は素面となる。

笠は、上 6 段下 2 段式の定形式で、高さ 30.8 ㎝、軒幅は正面 39.6 ㎝、左側面 39.8 ㎝、右側面 39.9 ㎝となり、軒厚は 4.1 ㎝となる。軒上の段形は、軒側面から 1.2 ㎝のところで立ち上げ、高さと奥行きは 1 段目は 2.5 ㎝×1.3 ㎝、2 段目は 2.3 ㎝×1.5 ㎝、3 段目は 2.2 ㎝×1.8 ㎝、4 段目は 2.3 ㎝×2.0 ㎝、5 段目は 2.2 ㎝×2.0 ㎝、6 段目は 2.5 ㎝となり、6 段目の側面から 3.5 ㎝のところに幾穴を造る。幾穴径は 9.4 ㎝となる。段形は 1 段目から 5 段目まではほぼ均等で、奥行きは上にいくほど広くなる。また軒上の三段目がやや外側に傾斜するほか、ほぼ直角に造る。隅飾は 1 箇所先端が欠けているが、二弧輪郭付で内部はすべて素面となる。隅飾の高さは 13.1 ㎝、下端幅 11.3 ㎝となり、軒端より 0.6 ㎝入って立ち、先端は下端の隅から 0.4 ㎝外側に出て 93 度外傾する。輪郭の幅は 1.5 ㎝、縁厚は 0.3 ㎝となり、左右の間隔は 15.4 ㎝となる。軒下の段形は、各段とも高さは 3.4 ㎝で、一辺の幅は、下段は 32.3 ㎝、最下段は 25.7 ㎝となる。

相輪は伏鉢と上部請花・宝珠の大部分が欠損し、現状では高さ 34.6 ㎝となる。下部請花は高さ 4.6 ㎝、下端径 11.0 ㎝、それより 3.4 ㎝上で最大径 13.6 ㎝となり、複弁八葉を刻出するが摩滅する。九輪は一輪の幅が 1.4～1.7 ㎝、各輪の間隔は 0.8～1.0 ㎝となり、輪形を克明に造る。現状では基礎からの総高は 118.0 ㎝となるが、欠けている伏鉢や宝珠などを考慮すると、本来の総高は 138 ㎝前後と推察される。その大きさは、三原市の米山寺にある沼田小早川氏の歴代墓所の宝篋印塔に匹敵する。

各部比率は、まず基礎の全高/幅の比率は 0.69、側面高/幅の比率は 0.52、輪郭の上/下幅の比率は 1.00、上/横幅の比率は 1.35、基礎幅/輪郭横幅の比率は 0.10、花頭形の比率は 0.50 となり、格狭間の脚は輪郭下端の 1/4 となる。また笠の高さ/軒幅の比率は 0.78、軒厚/軒幅の比率は 0.10、隅飾の高さ/下端幅

の比率は 1.16、軒幅/左右隅飾の間隔の比率は 0.39、上下端の比率は 0.65 となる。造塔時期について地元では鎌倉中期とされているが、各部比率や特徴から見て南北朝期、おそらく 14 世紀後半の基礎となろう。造塔者は、その大きさから見て小早川家の当主クラスと想定される。

なおこの塔は、もとは神社の南側の谷を流れる権現川を隔てた伊藤家の裏山にあった。伊藤家のすぐ裏手にはいくつかの平壇があり、いま五輪塔の残欠が集められている付近には葛籠寺があったと伝える。この寺は賀茂神社（東野町）の供僧であったと伝えるが、その詳細や廃寺となった時期はわからない。ただこの宝篋印塔が寺跡の裏山にあったという点を重視するならば、葛籠寺は小早川氏を外護者として南北朝期には存在し、近世初頭頃に廃寺となったのだろう。

(4)石塔から復元する小早川領の風景

石塔調査によって得られたデータをもとに、小早川領内の各地において歴史的な景観復元を行い、その一部は中国新聞でも報道された。ここでは紙幅の関係で 3 例を取り上げ、その要約を掲示する。

〔忠海〕港町として発展した竹原市の忠海は、海に突き出るようにのびた明星の岡を境に東西に分かれ、中世は、その東西を結ぶ旧道付近まで海が迫っていた。海岸からは山（北）に向かって 4 本の道がのび、どの道も標高 20 m台にある寺に向かっていた。おそらく中世は寺から海に続くこの道を軸に集落が形成されていたのであろう。その後、江戸時代にはいると岡の西側が港町の中心として栄えるが、中世の石塔は岡の東側に集中し、西側は少ない。このことから中世の忠海の中心は東側にあったと推定される。とくに岡のすぐ東側にある脇（阿弥陀寺跡付近）の土地に 15～16 世紀の石塔が集中することから、脇に向かう道筋が集落の中心であったのだろう。そして強い西風を避けるようにその麓付近に港が形成されていたと考えられる。戦国期になると忠海の戦略的な価値が高まり、小早川家重臣の乃美宗勝が町の西側にある海にせり出した小山に賀儀城を築く。宗勝はさらに北の山腹に勝運寺を創建するが、この城から寺にかけては戦国期以前にさかのぼる石塔がまったくない。宗勝は港町のなかに拠点を設けることができず、その周辺部に城と氏寺を創建して新たな領主の空間を創出したのである。

〔新庄〕竹原小早川家の本城は竹原市新庄町にある木村城であり、山麓付近（東野町）にその館跡と見られる土地がある。しかし木村城の城下周辺には南北朝期にさかのぼる宝篋印塔が少ない。これに対し城から北 1.8 ㎞ほどのところにある茶臼山城を中心とする一帯（新庄町・西野町）には、葛子神社・蕨山・林光庵・善明寺など南北朝期から室町初期にかけての宝篋印塔が散見する。茶臼山城は木村城と比較すれば小規模な城となるが、眼下に旧山陽道を見渡し、中腹には規模の大きな平壇が確認される。さらにその下の水田は領主直営田に由来すると思われる「ショウジャク」（正尺）の地名が残り、このあたりではもっとも良質な耕地になる。こうした点からすると竹原小早川氏は初め茶臼山城を背負うショウジャクの地に館を構え、室町期になって木村城に拠点を移したのではないだろうか、そんな謎解きをいまはじめている。

〔安浦〕呉市安浦町には内海衆という武士団が存在したことは知られていたが、文献資料が皆無という状況もあって「小武士団」という低い評価しか与えられてこなかった。ところがその本拠と見られる寺迫周辺などには南北朝期にさかのぼる宝篋印塔が少なくとも 4 基確認され、その造りや規模は小早川家の造立した宝篋印塔に引けを取らない質の高いものだった。このことは内海衆が領地の規模こそ小さいものの、かなりの財力を有する武士団であったことを想定される。おそらく内海衆は、目の前に広がる瀬戸内海の海上交通を掌握して成長してきた海の領主であったのだろう。小早川氏が室町期に内海氏を取り込むにあたって一族として優遇した背景には、内海衆が握る海上権の掌握なくしては西に勢力を拡大できなかったからである。

上記の 3 例は、文献資料がなくても石塔があれば歴史を読み解けることを示した好例であり、それが可能だったのも今回初めて石塔の悉皆調査を実施したことにある。その意味で石塔調査から得られた情報は、実に大きなものがあったといえよう。今後はこの成果を土台にして、いまだ調査がおこなわれていない地域に調査対象を広げ、瀬戸内海地域における石塔文化圏の全体像を描きたいと考えている。

５．主な発表論文等

〔その他〕

新聞報道

「竹原の木村城跡―安芸津　山越え最短ルート確認　小早川氏の拠点立証」

（2006 年 6 月 8 日『中国新聞』朝刊）

６．研究組織

(1)研究代表者

舘鼻　誠（TATEHANA　MAKOTO）
専修大学・文学部・兼任講師
研究者番号:００３８４６７８